趣旨説明

―若手研究者による教育研究再考の試み―

上地香杜・野村駿

はじめに

本誌『教育論叢　特別編』では，『教育学年報 11　教育研究の新章』（下司晶・丸山英樹・青木栄一・濱中淳子・仁平典宏・石井英真・岩下誠編，2019，世織書房。）に掲載されている各章に対する書評論文を掲載している。書評論文は，名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学に在籍する野村駿・上地香杜が企画した読書会（名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻自治会との共同開催）での議論をふまえて執筆された。本章では，書評論文の趣旨と，書評論文を執筆するにいたった経緯について説明する。

1.『教育学年報 11　教育研究の新章』の概要

> *新時代にふさわしい教育学の新たなアイデンティティを構築あるいは再確認するために，そして教育研究の世界に知的な刺激にあふれた自由で活発な論争がこれまで以上に活性化することを願って，ここに『教育学年報』を再び始動します。*
>
> （下司・丸山・青木・濱中・仁平・石井・岩下編，2019，p.i）

上記の説明は，『教育学年報 11　教育研究の新章』（以下，『新章』とする。）の冒頭に書かれているものである。『新章』は，教育学の新たなアイデンティティの構築，または再確認のための議論を活性化させることを目的として復刊した学術誌であり，『教育学年報』の第 11 号にあたる。

『教育学年報』は，1992 年に森田尚人，藤田英典，黒崎勲，片桐芳雄，佐藤学の 5 名によって創刊された。その際の大きな趣旨は，戦後教育学の批判的検討である。戦後教育学は，戦前の反省をもとにして，国家や経済の支配から教育を守るために教育の自律性や教育独自の価値を求めてきた。一方，それらを重視するあまりに他分野の研究成果の摂取には消極的であり，「自閉的な傾向をもたらすことに」なるといった批判が展開された。（森田・藤田・黒崎・片桐・佐藤編，1992，p.i）そこで，『教育学年報』は他の学問領域の成果を積極的に取り入れながら，戦後教育学の限界や教育自体のもつ問題性を指摘することで教育研究における新たなフロンティアを提供するために発刊された。そして 1 巻から 10 巻を発刊し，一定程度の役割を果たしたとして 2004 年に休刊となった。

休刊から 15 年たった 2019 年に復刊したのが，今回の『新章』である。今回の復刊の理由について編者は「社会と教育研究の変化」（下司・丸山・青木・濱中・仁平・石井・岩下編，2019，p.ⅱ）をあげている。社会の変化として，大きくは政治的構図の変化があげられる。それにより教育を「国家対国民」で捉えることの限界や，グローバリゼーションを背景とした新たな共生の在り方，国際的な学力調査がもたらした教育政策への影響など，新たな論点が誕生している。また，教育問題に対して心理主義的な説明から，経済的格差などの社会的文脈での説明へと変化，さらには，新自由主義や国家主義･新保守主義の台頭による教育への影響などさまざまな論点があげられる。同時に，教育については学習だけでなく，労働や福祉等の他の社会システムとの融合（ボーダレス化），かつ融合したことによる領域の再線引きの必要性，教育研究については，隣接分野との連関の必要性が

指摘されている。（下司・丸山・青木・濱中・仁平・石井・岩下編，2019）また，教育学の主要な役割である教員養成においては，教育学自体の方向付けが国や制度を規定するような事態にもなっている。このような危機的な状況において，教育学は教育学以外の分野で，自身を説得的に語るための存在意義を持ち得ているのか，という教育学自体のアイデンティティの危機に応答することが『新章』ならびに，新たな『教育学年報』の目指されるところである。

このような問題意識のもと，今回の『新章』では 4 部構成の形式をとり，全 14 領域の専門家によって各領域の現時点における到達点が示されている。各部のあとには，「座談会」として編者による各領域についての討論が収録されている。目次は以下の通りである。

第Ⅰ部
下司　晶「教育哲学―批判の後に何が来るのか？―」
柏木　敦「日本教育史―一九九〇年代から二〇一〇年代までの動向―」
岩下　誠「西洋教育史―教育社会史研究の誕生と終焉？―」
❖座談会　教育学の実践性とは何か―教育哲学をめぐって―
❖座談会　教育〇〇学は親学問との関係をどう取り結ぶべきか―西洋教育史をめぐって―
第Ⅱ部
石井英真「教育方法学―「教育の学習化」を問い直し教育的価値の探究へ―」
加藤弘通「教育心理学―〈マインド〉から〈アウトカム〉へ―」
赤木和重「発達研究―教育学における発達論の衰退のさなかで―」
❖座談会　教育実践の学を追求するとは―教育方法学をめぐって―
第Ⅲ部
髙橋　哲「教育法学―「防御の教育法学」から「攻めの教育法学」へ―」
青木栄一「教育行政学―比較研究の方法論からの棚卸し―」
篠原岳司「教育経営学―学校の自律性と臨床的アプローチ、その追究の先に―」
❖座談会　社会科学への一歩を踏み出す―教育行政学をめぐって―
第Ⅳ部
仁平典宏「教育社会学―アクティベーション的展開とその外部―」
丸山英樹「比較教育学―差異化と一般化の往復で成り立つ―」
橋野晶寛「教育経済学―教育学研究者はどこに「経済学」を見出し、向き合うのか―」
❖座談会　教育社会学は自由と政治の夢を見るか―教育社会学をめぐって―
❖座談会　外国との比較を通して研究の連携へ―比較教育学をめぐって―
第Ⅴ部
濱中淳子「高等教育論―その意義が実感される日は来るのか―」
佐藤智子「社会教育・生涯学習論―現代社会教育制度の生成と変容―」
❖座談会　環境の変化にどう対峙するのか―高等教育論をめぐって―

2. 本書評論文の位置づけ

次に，本誌に掲載している書評論文の位置づけを説明する。書評論文は名古屋大学大学院教育発達科学研究科に在籍する野村駿・上地香杜（以下，企画者とする）が企画・運営した，『新章』の読書会がもとになっている。以下では，書評論文執筆の経緯と，読書会の開催状況の順に説明する。

(1) 問題意識―「教育学とは何か」 を読み解くために

本企画の端緒は，企画者の「教育学とは何か。」という素朴な疑問からであった。企画者は教育社

会学を専門としているため，日頃から教育社会学や社会学についての勉強を続けてきた。同時に，教育学に対しては漠然と,「規範学問的なイメージ」や「文献資料中心のイメージ」が先行していた。しかし，当然ながら現在の教育研究においてはそうした研究が中心を占めるわけではなく，かつては教育社会学が中心となって取り組んできた「実証性」を重視した研究も数多く蓄積されている（広田 2017）。そうすると，現在の「教育学」とはいったいどのような学問領域として捉えられるのだろうか。例えば，企画者の所属している名古屋大学の教育学部は，大きく教育学系と心理学系で分かれており，教育学系の中には 15 の領域がある。心理学系にも 10 の領域があり，どちらを卒業しても教育学の学位が得られる[1]。このように，同じ「教育学」の学位が授与されるが，それぞれに学ぶ「教育学」の中身は異なる。当然，どの領域で学んだかによって，想定している教育学は異なったものになるだろう。そうした中で，どこに共通の教育学を想定できるのか，またできないのか，といった疑問が残る。

このような疑問を企画者である野村・上地が共有していたときに,『新章』の発売を知り，読書会の開催を思いついた。また同時に，この本をそれぞれの領域の院生との共同討議によって読み解くことを思いついた。先に示したように，企画者は幅広いはずの「教育学」を理解していないのではなく,「誤って理解している」可能性が高い。そこで，教育学の各領域の院生との共同討議を経ることで，教育学の「いま」を再認識できると考えたのである。

（2）読書会の開催

読書会は名古屋大学大学院教育発達科学研究科の院生を中心に声をかけて実施することとした。読書会の開催スケジュールについては表の通りである。扱った順番が『新章』の掲載順でないのは，参加者のスケジュールの都合によるものである。

読書会の開催は院生間のメーリングリストで周知し，学内にはポスターを掲示した。参加は院生に限らず広く受けつけ，Skype 等のオンラインによる参加も受け付けた。読書会では，次項で説明する書評論文の執筆者に各章のレジュメを依頼し，それをもとに議論する形式とした。各章 1 時間程度の議論とし，毎回 2 章ずつ進めた。座談会については読書会の範囲に含めなかったが，回によっては座談会の内容も議論に含めた。毎回の参加者は，10～20 名ほどであった。なお,「発達論」に関しては担当者が見つからなったため，今回の読書会および書評論文では扱っていない。

表．読書会の開催スケジュール

	日時	内容
第 1 回	10 月 16 日	まえがき　趣旨説明
第 2 回	11 月 6 日	日本教育史　西洋教育史
第 3 回	11 月 13 日	教育心理学　教育哲学
第 4 回	11 月 27 日	教育方法学　社会教育・生涯学習論
第 5 回	12 月 4 日	教育法学　教育行政学
第 6 回	12 月 11 日	教育社会学　高等教育論
第 7 回	12 月 18 日	教育経済学　比較教育学
第 8 回	12 月 25 日	教育経営学

読書会は教育学の各領域を理解し，教育学の今を再考するという大きな目的のもとで実施されたが，副次的な目的として院生間の領域を超えた学問的交流があげられる。『新章』においても教育学・教育研究の学際性，またそれゆえの存立の危うさが指摘されているが，教育学・教育研究を志

す院生・若手研究者がどこまでその状況を把握できているのかは疑問が残る。自分の領域に関する知識を深める一方で,「隣の研究室が何をしているのかわからない」または「〇〇領域は△△といったイメージ」といった固定的なイメージをもっていないだろうか。例えば，名古屋大学大学院教育発達科学研究科は教育科学専攻と心理発達科学専攻に分かれている。同じ建物で学んではいるが，専攻間の交流はほぼない。専攻内でも各領域に自律的な研究を行っている反面，他領域との交流は希薄であるのが現状である。そうした身近な世界さえも知らないままに,「教育学」を学び続けることの危機感が企画者にはある。もちろん多少なりともフォーマル・インフォーマルに領域間の交流の機会は設けられているが，今回は新たに共通の文献を頼りに，領域を超えた学問的な交流を生み出すことも 1 つの目的として読書会を開催した。

(3) 書評論文の執筆

読書会での議論を踏まえて,書評論文を執筆することが本企画の主要な部分である。書評論文は，企画者が事前に各領域の博士後期課程の院生もしくは OB・OG に執筆依頼を行い，承諾を得られた方に依頼した。執筆者は，企画者が依頼した本人を含め，各領域内の院生もしくは OB・OG で調整してもらう形とした。依頼の過程で，発達論に関しては適任者が見つからず，今回は執筆を断念することとなった。

書評論文の内容については,『新章』における各章の概要を提示したうえで，読書会での議論や各領域における『新章』以外での議論などをふまえて，論評してほしいと依頼した。内容については，初稿をもとしたオンライン検討会（2020 年 3 月 8 日・9 日）を開催し，企画者ならびに執筆者間で内容の確認を行い，最終稿を提出してもらった。最終的な内容については，各執筆者の判断によるものである。なお，本企画の企画・運営および企画趣旨については企画者である野村駿・上地香杜の裁量によるものであり,『教育論叢　特別編』においては 2 人が編者となっていることを付言しておく。

〔注〕

[1] これは学士課程の場合に限った例である。博士前期課程・博士後期課程では教育科学専攻と心理発達科学専攻に分かれている。教育科学専攻では，教育学の修士・博士の学位を，心理発達科学専攻では心理学の修士・博士の学位を取得できる。

〔文献〕

下司晶・丸山英樹・青木栄一・濱中淳子・仁平典宏・石井英真・岩下誠編，2019,『教育学年報 11　教育研究の新章』，世織書房.

広田照幸，2017,「教育社会学と隣接諸学」日本教育社会学会編，本田由紀・中村高康責任編集『教育社会学のフロンティア 1　学問としての展開と課題』岩波書店，pp.19-39.

森田尚人・藤田英典・黒崎勲・片桐芳雄・佐藤学編，1992,『教育学年報 1　教育研究の現在』世織書房.